

「井戸の茶碗」の人・物・金

何十年も前に古今亭志ん朝の「井戸の茶碗」をカセットテープに収めた。音源はラジオだったような気がする。何度となく繰り返し聴いている内に「この噺の味」が染み出してきてアタリメを噛むような味があることがわかり、それとともに、「志ん朝の井戸の茶碗」の味がわかってきた。

それから数年後、父親である「古今亭志ん生の井戸の茶碗」も聞いて見たくなくて、そこら中のお店を探し歩いて見つけてきた。暫くの間親子の落語を何度も聴き比べて見た結果、自分なりの結論が出た。

「井戸の茶碗」は人情の機微が最も重要なポイントで、登場人物の個性の違いを明らかにしながら、それぞれの人が持つ実直さ・優しさ・良心などが十二分に表現されている所に面白さがある。登場人物の声色の見事な使い分けと微妙に異なる心意気の表現、要所に笑いを折り込んだ志ん朝の方が完成度の高さを感じた。その他の落語も聴きあさり、志ん生と志ん朝の落語を比べて見たが、志ん生の「子別れ（全篇通し）」には涙が出るほどに引き込まれた。遊び過ぎて道を外れて落ちてしまい妻子に逃げられた一人の男が、落ちる所まで落ちた後に心を入れ替えて元の鞘に戻る所までをたっぷりと聴かせてくれた。

この「子別れ」と、喉をたっぷり聴かせてくれる「稽古屋」は志ん生ならではのものと感じた。

6年ほど前、我が人生で初めて10日ほどの入院を体験した。入院中の気分の転換と退屈しのぎのために、志ん朝の井戸の茶碗のテープを持って行った。胃の内視鏡手術の後、鼻と股間に付けられたチューブを外してもらった翌日、少し気分も落ち着いてきたので聴きながら気になったことをメモしてみた。

何度か聴いている内に登場人物の間で動く「物と金」を図示してまとめて見たらどうなるかと思いつき、小さなノートの一頁にメモ書きして見た。

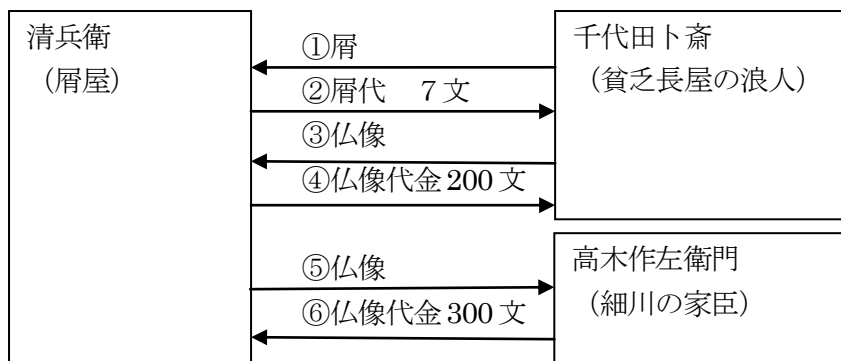
麻布茗荷谷に住む屑屋の清兵衛はある日貧乏長屋に住む千代田ト斎から屑を買い取る。その時に、ト斎は日々の暮らしにさえ困る状況ゆえに先祖から受け継いできた大事な仏像も売りたいと言う。

正直者の清兵衛は「私は屑以外は取り扱わない」と骨董品の引き取りを拒むが、ト斎の懇願に負けて、「もしどこかで売れたら、その差益の半分をお届けする」という約束で200文で預かることにした。この日の屑代7文を支払い、背にした籠の中に仏像を放り込んで次の客を求めて歩き去る。

ここまでの流れを図示するとこんな絵になる。



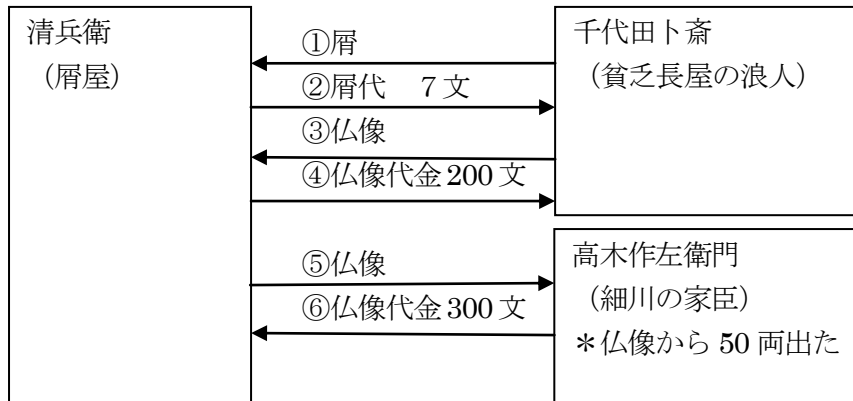
細川様の御屋敷の下を歩いていると、屋敷の高い所から侍（高木作左衛門）に呼びとめられる。細川の家臣高木作左衛門は籠の中の仏像を見たいと言う。そして、しばし仏像を見た後「300文で買いたい」と言う。



仏像を手にとると中に仏がもうひとつ入っている「腹籠り」のようで、大層縁起の良いものを手に入れたと高木作左衛門は大喜び。一方清兵衛は 200 文で預ってきた仏像が 300 文で売れたので、約束通りその差益 100 文の半分の 50 文を千代田ト斎に届けて喜んでもらえると思ったのだが・・・。

仏像を手に入れた高木作左衛門が金盥に入れた水で洗っていると、台座の紙が破れて中から何か落ちてきた。腹籠りの仏が出てきたと思いきや、落ちてきたのは 50 両の金子（きんす）。高木作左衛門は悩む。

「仏像は買ったが、中の金子を買った覚えはない。この 50 両は俺のものではない」



流しの屑屋を捕まえるすべがなく、止むなく通りがかる屑屋を順に面会あらためまでして苦心の末清兵衛との再会を果たす。清兵衛は仏像が売れたことによる差益の半分である 50 文を約束通り高木に渡すが、逆に「仏の腹から出た 50 両を高木作左衛門に返してくれ」と頼まれてしまう。

托された 50 両を持って出向いて行すが、千代田ト斎は受け取ってくれない。

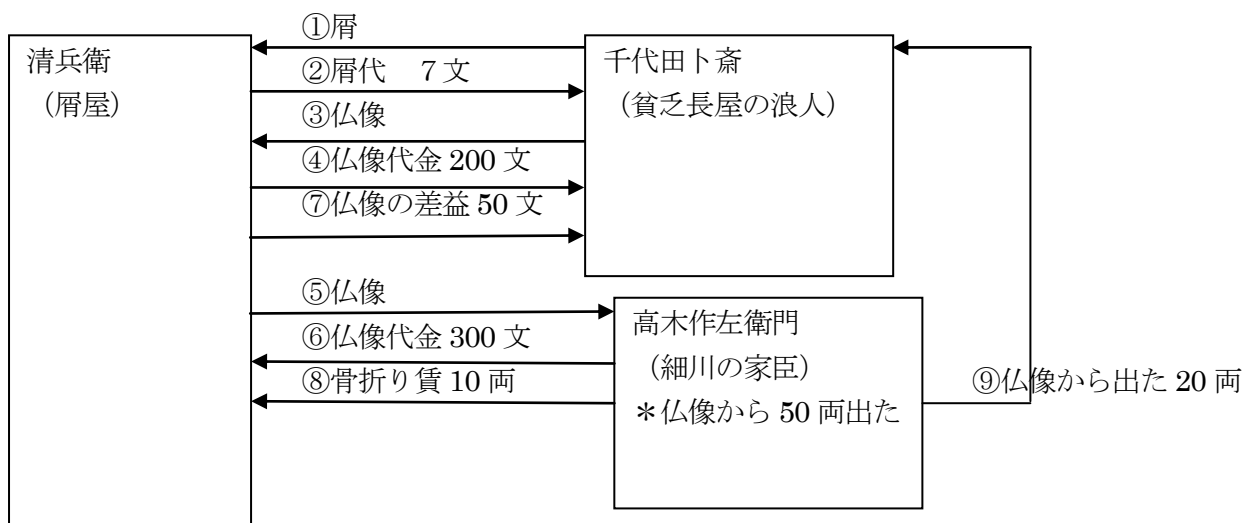
「あれは買った者の持ち物だ。先祖が、いざという時の為に仏の中に金子を入れてくれたのだろうが、そのような大事な物を売り飛ばすような料簡の者に授かるものではない」。

そして双方とも譲らず、「拙者、刀にかけても受け取る訳には参らぬ」と刃傷沙汰にまで発展してしまう。

清兵衛は間に挟まって困ってしまい千代田ト斎が住む長屋の家主に相談する。そして出た解決策は

「10 両を屑屋に骨折り賃として渡し、残り 40 両を高木作左衛門と千代田ト斎で 20 両ずつ分ける」

家主の調整策に従って双方とも 20 両を受け取ったが・・・。



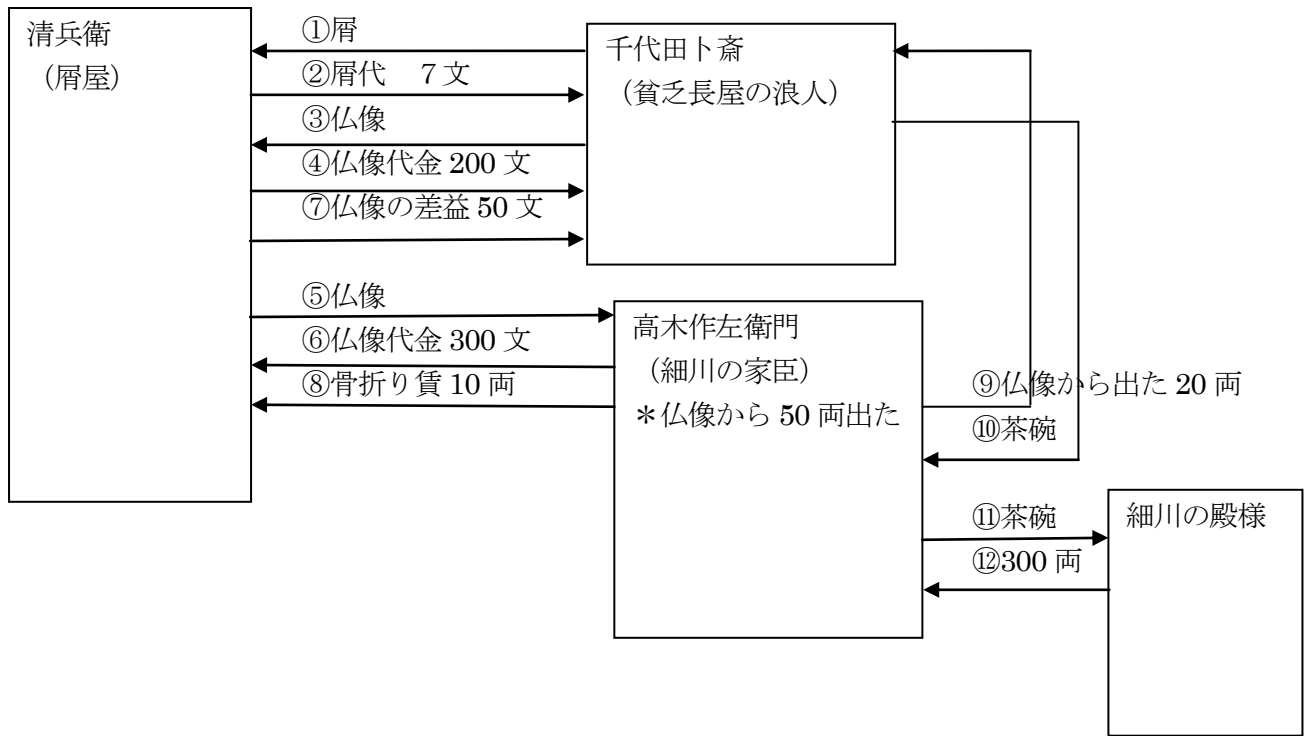
千代田ト斎は「高木氏に恵んでもらったようでどうもすっきりしない」と再び悩んでしまい屑屋にこぼす。それならば、何か手元にある軽いひと品をお届けするというにしたらどうかと提案。

ト斎の座右の湯呑をお届けして、ようやく決着が付いた（と思ったのだが・・・）。

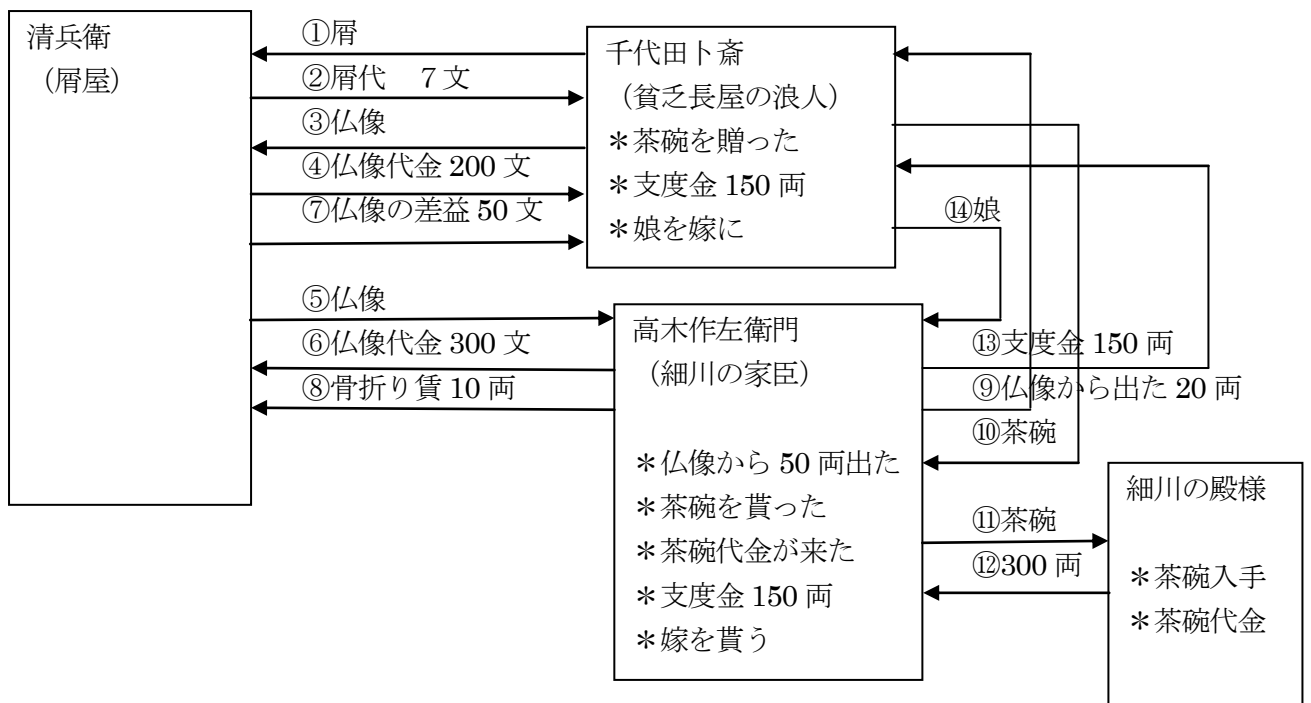
高木作左衛門は、細川の殿様に茶碗を見せて事の顛末を報告。殿様は意に介さぬ様子だったが、出入りの目利きがこの茶碗を見てあっと驚いた。「これは井戸の茶碗と言って、世に二つとない名器」と聞かぬ殿様は翻意豹変「これは与が所望するぞ」ということになった。

殿様は茶碗を召し上げた代りに 300 両を高木作左衛門に下賜するのだが、高木はここで再び頭を抱えてしま

い屑屋を呼ぶ。



「茶碗は千代田氏から出た物、この 300 両は私が受け取るわけにはいかない。千代田氏に返してもらいたい」屑屋も調整に関わっている内に本業の時間がなくなってしまうとぼやく始末。そして辿りついた答えは、「自分が先に半分の 150 両を受け取るから、残りの 150 両を千代田氏に届けてくれないか」と屑屋に頼む。清兵衛は屑屋の仕事をしていられない状態になってしまったが、しどろしどろ千代田ト斎が住む長屋を訪ねる。「屑屋さん、私はこの金は受け取れない」の一点張り。屑屋がひねり出した窮余の一策は、「じゃ、また何か差し上げたらどうでしょうか」「一人娘を高木作左衛門の嫁に」ということで纏まるならば、150 両は支度金として受け取ろうではないかと千代田ト斎は意を決する。



そして見事としか言いようがない「落ち」に向かう。

「善人・善意・正直がぶつかり合う」ことで生まれる「小さなもめごと」、しかし誰ひとり傷つくことなく収まる所に収まるという美しい話。さらっと語ってしまえばどうということはない話だが、善良な人々の心の機微を捉えて語るからこそその落語である。

また、何人かの善人の間を行きかう「人と物と金」がこの人情話の大きな核になっており、登場人物以上の働きをしているようにも見えて来る。

「井戸の茶碗」は何度聞いても素晴らしい、好きな落語のひとつである。

以上